



生産者や消費者の声に耳を傾け 美味しい野菜の種を追求していく

中原採種場株式会社 代表取締役社長 田中 清喜氏

長年の研究のもとに 350種類の種を提供

1950年、園芸相談所として青果市場の一角でその歴史をスタートさせた、福岡市博多区那珂の中原採種場株式会社。創業したのは代表取締役社長の田中清喜さんの祖父にあたる中原清さん。公務員として戦後の食料の安定供給や種子の生産に従事した経験を生かして起業。種の販売についての要望を受けたことをきっかけに、現在の採種事業が始まったのだといいます。1980年には本社を福岡市博多区那珂に移転したものの、青果市場がアイランドシティへと移るまでは販売店を市場内に構えており、早朝から競りを終えた生産者たちで賑わっていたそ

うです。また1973年には福岡市城南区南片江に油山研究農場を開設。以来、種の販売だけではなく野菜の品種改良などにも携わり、オリジナルの品種を世に送り出しています。

4代目となる田中さんは「私たちの仕事をひとことで言うと、美味しい野菜の研究です。消費者の方たちが口にした時に美味しく、笑顔になってもらえるような瞬間を想像し、一方で高い収量性や耐病性など生産者の皆さんの要望も叶えられる野菜をつくるために、日夜品種改良を進めています」と話します。

そうして中原採種場オリジナルとして販売しているのは約350種類。主力は主要野菜でもあるダイコンやニンジン、小ネギなど。「中でもダイコンに

は昔から力を入れていて、カタログに載っているものだけで50種類ほど。なかなか消費者の方がご存じない部分ではありますが、ダイコンとひとくちに言っても漬物用や、おでん用、また大根おろし向け、刺身のつま向けなど、調理方法や用途によって種類が違います。加えて育てる地域の気候、土質などによっても種類は変わってくるため、実は非常に専門性が高いのです」と田中さん。

消費者や生産者の声に耳を傾けながらつくられた野菜は日本だけではなく、韓国や中国、南米、ヨーロッパなどでも育てられているほか、13カ国の契約農場で種を生産。中国の青島には自社農場を設けるなど、「ナカハラのたね」は世界中の食を支えています。

【プロフィール】

福岡県生まれ。1996年、家業である中原採種場株式会社に入社。2016年に4代目の社長に就任。趣味はゴルフ。山笠のために始めたジョギングが日課で、福岡マラソンなどにもエントリーしている。



1 青果市場内にあった創業当時の中原採種場。園芸相談所の名前通り、当初は生産者からの野菜に関する相談などに答えていたという

3 本社1階には店舗を併設。家庭菜園向けから生産者向けまでさまざまな種類の種を販売している。営業時間は午前8時半から午後5時半まで

2 中原採種場の研究を担う油山研究農場。産学連携、産官連携をはじめ、ほかの企業とも共同で野菜の研究に取り組んでいる

4 ダイコンの種をとる海外の採種場。一面に花が咲き、このあと実る種を収穫し、乾燥・精選などの工程を経て市場に送られる

刻々と変化する社会に 対応できる野菜を開発

「高齢化や農業人口の減少、核家族化と、私たちを取り巻く環境は日々変化しています。しかし野菜生産を省力化できる種子、あるいは少人数の家族でも消費しやすいコンパクトなものを開発するなど、品種によって対応していくことができると考えています」と田中さん。

そして社会生活を激変させた新型コロナウイルス感染症。それに伴って外食産業が縮小し、野菜も家中消費が増加。外食産業向けに野菜をつくらせた生産者からの注文は減った一方で、ベビーリーフなど食卓を彩る野菜の売上は伸びていったそうです。加えて植物工場の増加もひとつの転換期となっています。

田中さんは「近年になり閉鎖型で人工的に光を当て水耕栽培を行う植物工場が増えてきました。レタス類が多いのですが、畑でつくる露地と違ってサイズなどに制限があるため、これまでとは違った発想で品種を改良していかなければなりません。そうした植物工場向けの品種に関しても、いち早く注目

して開発を進めてきました」と話します。また地方の野菜の品種保護にも努め、かつお菜や春菊など伝統野菜を後世に伝えていくことにも尽力しています。

SDGsに取り組みながら 地道に美味しい野菜を研究する

今後の展望については「長年やってきたことではありますが、SDGsに向けた取り組みをブラッシュアップしていきます。業務の面では海外に依存傾向だった採種を再び国内へと移し、雇用の創出や品質の向上へとつなげていきたいと思っています。また食育に関しても10年以上継続しているので、こちらも続けていきたいですね」。一方、海外に対しては種苗法改正を好機として捉え「オリジナルの品種を安心して販売できる」と意気込みます。

ひとつの品種を開発するためにかかる年月はおおよそ20年。しかも百発百中で市場に提供できる品種ができるわけではなく、100通りの品種を開発して納得できるものはひとつ程度と困難な道です。種を収穫するためにも生産計

画を立ててから約2年が必要だという業務形態からか、田中さんは経営のモットーとして「無理はしないが、決して諦めないこと」を大切にしているそう。

一日にしては成らない種の開発。だからこそ営業に関しても、じっくりと時間をかけるスタイル。「どんなに良いものができたとしても、一気に市場に売り込もうとは思っていません。生産者の皆さんに地域や天候にあった種を選んでもらい、実際に野菜をつくってもらって、気に入っていただければそこで選んでもらう。時間をかけて私たちの商品の良さを知ってもらえればと思います」。

取材日：10月6日



中原採種場株式会社

〒812-0893 福岡市博多区那珂5-9-25

TEL.092-591-0310

<https://www.nakahara-seed.co.jp>